

注意!

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

平成21年1月

病害虫防除技術情報 No. 20-2

岩手県病害虫防除所

岩手県におけるハモグリバエ類の新規発生について

本年、県内でアシグロハモグリバエ及びトマトハモグリバエの発生を初確認した。そこで現在の発生状況と防除方法について既知見を整理した。

1 背景

近年、野菜類・花き類において、通常の防除を実施してもハモグリバエ類の被害が抑えられない事例が見られている。加害種の同定を行った結果、本県在来のナスハモグリバエに加え、アシグロハモグリバエ及びトマトハモグリバエを初確認した。これらは広食性であり分布拡大が懸念されること、種により効果のある薬剤が異なることから、3種ハモグリバエについて現在の発生状況をまとめるとともに発生生態と防除方法について既知見を整理した。

2 発生状況

(1) 県内及び国内での発生状況は表1のとおりである。

表1 3種ハモグリバエの発生状況

種名		県内での発生状況	国内での発生状況
ナスハモグリバエ (<i>Liriomyza bryoniae</i>)	在来	県内で広く発生 奥州市 ハウストマト*、露地りんどう* 花巻市 ハウスりんどう*	国内で広く発生。
アシグロハモグリバエ (<i>Liriomyza huidobrensis</i>)	岩手県 初確認	一関市 ハウスきゅうり 藤沢町 ピーマン、トマト、トルコギキョウ 陸前高田市 露地きゅうり 二戸市 露地きゅうり	2003年に北海道、山口県で初確認。 その後宮城県、青森県、広島県、群馬 県で確認**。
トマトハモグリバエ (<i>Liriomyza sativae</i>)	岩手県 初確認	一関市 ハウスなす	1999年に沖縄県、山口県、京都府で 初確認。国内で広く発生。東北では 山形県、福島県、宮城県で確認**。

(*:多発事例 **:特殊報で報告されているもの)

3 形態及び生態

(1) 成虫は体長2mm前後、老熟幼虫は体長3mm前後で、外観が類似しており、正確な同定には雄成虫交尾器の形態、またはPCR法による確認が必要である(写真1~3)。



写真1 ナスハモグリバエ



写真2 アシグロハモグリバエ



写真3 トマトハモグリバエ

(2) これまでに確認されている寄主植物は表2のとおりである。

表2 寄主植物

科名	ナス科			ウリ科		キク科						アカザ科	マメ科	アブラナ科				ユリ科	ナデシコ科	リンドウ科				
	トマト	なす	ピーマン	きゅうり	かぼちゃ	メロン	レタス	ごぼう	しゅんぎく	きく	アスター	マリーゴールド	ほうれんそう	いんげんまめ	キャベツ	だいこん	かぶ	チンゲンサイ	はくさい	ねぎ	宿根かすみそう	トルコギキョウ	りんどう	
ナスハモグリバエ																								
アシグロハモグリバエ																								
トマトハモグリバエ																								

北海道、青森県、宮城県、山形県、新潟県、山口県、広島県の資料より、一部引用改変。りんどうは岩手県で確認。

- (3) 1世代の経過は表3のとおりである。
- (4) ナスハモグリバエは蛹で越冬するが、アシグロハモグリバエ及びトマトハモグリバエは寒冷地での野外越冬はしないと考えられている。
- (5) 成虫は葉中に産卵し、ふ化幼虫は葉に潜ったまま葉肉を食害する。老熟幼虫は葉外に脱出し、土中(一部葉の表面)で蛹化する(写真4、5)。

表3 1世代の経過日数

種類	25	15
ナスハモグリバエ	約19日	約46日
アシグロハモグリバエ	約16日	約40日
トマトハモグリバエ	約18日	約52日



写真4 被害葉

写真5 蛹(アシグロハモグリバエ)

(ナス、トマトハモグリバエ)

4 防除方法

- (1) いずれの種も寄生範囲が広いので、ほ場内及び周辺の雑草を除去し、ほ場衛生に努める。
- (2) ハモグリバエ類の被害の見られる苗は定植しない。
- (3) ハウス栽培では、入り口や開口部にネット(目合い1mm以下)を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- (4) 被害残さは発生源となるため、ほ場外へ持ち出しビニールで被覆するなど蒸し込み処分する。
- (5) 密度低減のため、夏季のハウス内の蒸し込みが有効である。
- (6) アシグロハモグリバエとトマトハモグリバエについては、冬季に作付けしないハウスではビニールを撤去するなど、越冬場所を作らないようにする。
- (7) 種により効果のある薬剤が異なり、既知見は表4のとおりである。なお、**農業の使用にあたっては、対象作物に適用のあるものを使用すること。**(平成21年1月6日現在の農薬登録情報に基づき作成。)

表4 各種薬剤の効果

系統名	商品名	ナスハモグリバエ	アシグロハモグリバエ	トマトハモグリバエ
有機リン剤	オルトラン水和剤		×	
	カルホス乳剤		×	
	スミチオン乳剤		×	
ネライストキシン剤	バダン水溶剤			
	エビセクト水和剤			
合成ピレスロイド剤	トレボン乳剤		-	×
	アグロスリン乳剤		×	
	アディオン乳剤		×	×
昆虫成長制御剤	トリガード液剤			
	カスケード乳剤	×		
	マッチ乳剤	×		
ネオニコチノイド剤	ダントツ水溶剤		×	×
	スタークル顆粒水溶剤			×
	アルパリン顆粒水溶剤		-	×
	アクタラ顆粒水溶剤		×	×
	ベストガード水溶剤		-	
その他	アフファーム乳剤			
	コテツフロアブル			
	スピノエース顆粒水和剤			
	ハチハチ乳剤		×	×
	プレオフロアブル			
	コロマイト乳剤		×	

注)ナスハモグリバエとトマトハモグリバエについては徳丸(2004)の試験より補正死亡率 70%以上の薬剤を効果があると評価した。アシグロハモグリバエについては岩崎(2004)の試験より無処理区比 30%以下の薬剤を効果があると評価、及び増田(2006)の防除効果の評価を参考とした。

:効果がある
 ×:効果が期待できない
 -:知見なし

5 その他

上記3種とマメハモグリバエについて、病害虫防除所でPCR法による同定が可能となったので、薬剤防除を実施しても被害が目立つ場合は、最寄りの農業改良普及センター、または病害虫防除所に連絡する。

引用文献: 岩崎暁生 (2004)今月の農業48(12):17~21
 徳丸晋 (2004)今月の農業 48(12):22~27
 増田俊雄(2006)今月の農業 50(5):20~24
 「園芸作物の重要害虫ハモグリバエ類」宮城県病害虫防除所 HP
 参考資料: 中村茂雄ら (2007)北日本病害虫研究会報 58:201